

地域の水産業と比較しよう ～ ICT の活用～

宗實直樹 | 関西学院初等部

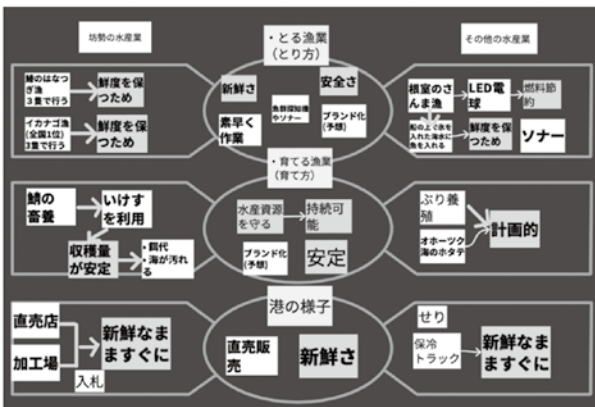
1. 単元をデザインする

5 年生の「水産業のさかんな地域」の実践です。事例は、社会的事象をより身近に感じさせるために地域の個別的な事例である坊勢島^{ぼうぜじま}（兵庫県姫路市）を扱いました。単元前半は、坊勢という個別の事例で具体的な理解をねらいました。

しかし、本単元で扱うのは地域学習ではありません。あくまでも産業学習です。「日本における」水産業のもつ一般的な傾向や特色を理解させることが重要です。そこで、単元の後半には、坊勢の事例と比較しながら、日本の水産業の現実や問題点まで範囲を広げ、一般化を試みました。坊勢という事例の具体的理解にとどまることなく、そこを窓口にして一般の水産業の全体理解につなげる単元デザインにしました。

2. 教科書の事例と比較する

地域の事例について学習を進めた後、教科書の事例と比較します。比較する観点を、①とる漁業②育てる漁業③港の様子にしました。ここで、ロイロノート^{*}の思考ツールを活用しました。



左図のように、坊勢の水産業の事例と教科書の事例を観点ごとに比較し、共通点と相違点を分類します。左側が坊勢の水産業に関すること。右側が教科書の水産業の事例に関すること。中央が、どちらの水産業にも関することです。つまり、左右が相違点、中央が共通点になっています。中央の「新鮮さ」「安全さ」「持続可能」などの共通点が、水産業として一般的に大切にされる概念となります。

3. 「目に見えるもの」と「目に見えないもの」を意識する

「目に見えるもの(事実)」は白色のカード、「目に見えないもの(意味や特色)」はピンク(本誌面では濃い色)のカードに書きます。そうすることで、自分が考えて導き出したものは、「目に見えるもの」なのか「目に見えないもの」なのかを自覚的に意識することができます。また、矢印でつなぐことで、社会的事象の因果関係が見えやすくなります。

ロイロノートの特徴の一つは「明示性」です。カードの色を変え、カード同士を結びつけるということが即時的にできるので、子どもたちも手軽に行え、一覧として関係性も見やすくなります。

このように「明示性」を意識することで、子ども達は自分が調べて見いだしたことに対し、カードの色や文字の色を意図的に変えるようになります。社会科で大切にすべき「目に見えない意味や特色」を意識するようになっていきます。

(参考文献)
樋口万太郎、宗實直樹、吉金佳能 (2021) 『GIGA スクール構想で変える! 1人1台端末時代の授業づくり2』

*1) 株式会社 Loilo (ロイロ) が提供しているタブレット用授業支援アプリのこと。